

Think globally, Act locally

2019

12.2-12.8

Thailand

文部科学省委託 2019 年度初等中等教職員国際交流事業

タイ教職員招へいプログラム 実施報告書



文部科学省委託 2019 年度初等中等教職員国際交流事業

タイ教職員招へいプログラム 実施報告書

兵庫県・徳島県（上板町、徳島市）

2019 年 12 月 2 日(月) — 12 月 8 日(日)

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ＡＣＣＵ）

はじめに

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU: Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO) は、ユネスコの基本理念に基づき、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現に資するため、アジア太平洋の人々と協働し、文化と教育の分野において地域協力・交流活動を推進しています。

ACCU は主にアジア太平洋地域の国々の相互理解と友好の促進を目的とし、日本政府および国際連合大学の協力のもと、2001 年より教職員の国際教育交流事業を開始しました。この国際教育交流事業は、日本と韓国、中国、タイおよびインドとの間で行われ、これまでに 4 千人を超える海外教職員を日本へ招へいし、また日本からは 1 千人以上の教職員を海外に派遣してきました。これにより、日韓・日中・日タイ・日印間で、多くの教職員間交流および学校間交流が生まれ、これらの国々の相互理解と友好の増進に大きく貢献してまいりました。

日タイ間の国際交流事業としては、2015 年から国際連合大学の主催する国際教育交流事業の一環として、文部科学省、タイ教育省の協力のもと、新たに「タイ教職員招へいプログラム」が始まり、毎年タイ教職員 15 名を本邦に招へいしています。加えて 2018 年度からタイ政府の招へいによる日本教職員のタイへの派遣事業が始まり、本事業における日タイの相互交流がますます活発になっている状況です。

第 5 回となる今回のプログラムは、文部科学省委託事業「2019 年度初等中等教職員国際交流事業」の一環として、2019 年 12 月 2 日から 8 日まで、タイの小・中・高等学校および特別支援学校の教職員等 15 名を日本に招へいしました。参加者は、日本の初等中等教育についての講義、学校や文化施設の訪問、日本教職員との教育交流会等を通して、日本の教育制度や持続可能な開発のための教育 (ESD) の実践および日本の文化・伝統についての理解を深めるとともに、両国間の相互理解と友好促進に貢献しました。

最後になりましたが、実施にあたりましては、文部科学省、タイ教育省、訪問受け入れにご協力いただきました学校・教育委員会の皆さまをはじめとした、多くの方々の多大なるご支援とご協力をいただきました。ここにあらためて、関係の皆様方に厚く御礼申し上げます。

2020 年 2 月

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

目 次

1. プログラム概要.....	5
2. 実施内容・訪問記録.....	15
3. 成果と今後への活用.....	31
タイ教職員.....	33
受入れ機関.....	42
事業担当者.....	46
付録	
付録1 文部科学省講義資料.....	49
付録2 プログラム写真.....	59
付録3 過去のプログラム実績.....	65

1. プログラム概要

プログラム概要

1. 実施の背景

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）は、ユネスコの基本理念に基づき、相互理解の促進と持続可能な社会の実現に資するため、アジア太平洋の人々と協働し、教育と文化の分野において地域協力・交流活動を推進しています。その活動の一つとして、アジア太平洋地域の国々の相互理解と友好の促進を目的に、未来を担う子どもたちを育む「教職員」を対象とした国際交流事業を日本政府の協力のもと 2001 年より開始し、これまでに日本と韓国・中国・タイ・インドとの間で、4 千人を超える海外教職員を日本へ招へいし、また日本からは 1 千人以上の教職員を海外に派遣してきました。その結果、教職員の学びが数多くの生徒・教職員・地域住民に還元されるほか、当事業をきっかけに多くの学校間の国際交流が生まれ、各国間の相互理解と友好の促進に貢献してきました。

初等中等教育にかかる日本とタイとの交流事業は、2015 年度にタイ教職員を日本に招へいするプログラムが開始されて以来、毎年 15 名のタイ教職員が日本を訪問し、教職員や児童・生徒との交流を深めてきました。そして、これらの実績が評価され、2017 年に行われた日タイの教育大臣による会談においてタイ政府による日本教職員の受入れが提案されたことを契機に、2018 年より「タイ政府日本教職員招へいプログラム」が開始され、2019 年 9 月までに計 12 名の日本教職員がタイを訪問し、日タイ教職員による相互交流がますます活発になっています。

第 5 回となる本プログラムでは、文部科学省の委託により、2019 年 12 月 2 日（月）から 12 月 8 日（日）までの 7 日間にわたりタイから初等中等教育に携わる教職員等 15 名を本邦に招へいします。

2. 目的

本プログラムの目的は、下記 3. に記されているプログラム期間中の活動およびプログラム前後の情報交換、交流活動等を通して日タイの教職員が相手国に対する理解を深めるとともにお互いに学び合い、相互理解と友好を促進することです。

所属機関の代表として本プログラムに参加する教職員は、プログラムを通して得た経験や学びを児童生徒・教職員・地域住民等に広げ、持続可能な開発のための教育（ESD）や地球市民教育（GCED）を含む国際理解・国際交流を推進する担い手となることが期待されています。

プログラムを通して交流する訪問先の教職員や児童生徒はもとより、参加者間でもネットワークを構築・交流を継続することで、ともに上記の目的を達成することを目指します。

3. 活動内容

- (1) 日本の教育制度および政策・課題を学ぶ
- (2) 学校等の訪問（授業見学、児童・生徒との交流、特色ある教育活動の視察等）
- (3) 日本の教職員との交流・意見交換会
- (4) 教育・文化施設の視察

4. 日程

日付	日程	訪問先	活動
12月2日（月）	第1日	兵庫県神戸市	日本到着 オリエンテーション
12月3日（火）	第2日	兵庫県神戸市	日本の教育に関する講義 学校訪問
12月4日（水） 12月6日（金）	第3日- 第5日	徳島県板野郡上板町	学校訪問 文化・教育施設訪問
12月7日（土）	第6日	兵庫県神戸市	プログラム報告会、教育交流会 閉会式
12月8日（日）	第7日	帰国	

5. 参加者数

15名

6. 参加資格

- (1) 国際理解教育、ESD（持続可能な開発のための教育）、SDGs（持続可能な開発目標）等に高い関心を持つ者。
- (2) プログラム参加中に得た成果を帰国後に自身の所属先、ひいてはタイの教育に還元する姿勢を持つもの。
- (3) プログラム参加中ならびに参加後も積極的に主に教育分野における日本との交流および国際相互理解を深める活動に取り組む姿勢を持つもの。
- (4) タイ王国の国籍を有すること。
- (5) 所属する学校等からの推薦を受けた、タイの初等中等教育に携わる教職員および教育行政職員であること。（教育行政官及び教育専門家を含む）
- (6) 健康でプログラムの全日程に参加が可能であること。

7. 評価と報告

- (1) 日本出発前（第7日）
各参加者は ACCU の用意する評価票に記入する。
- (2) 帰国後
各参加者はプログラム中および帰国後に行った活動と成果に関する報告書を作成し、タイ教育省に提出する。タイ教育省は、取りまとめた報告書を 2020 年 3 月 10 日（火）までに ACCU に送付する。

8. 渡航費等

ACCU は下記の経費を負担する。

- (1) 往復航空運賃
タイ国内の指定された国際空港と、日本国内の指定された国際空港との間のエコノミークラス航空券。

(2) 宿泊と食事

プログラム期間中の宿泊（朝食含）、およびプログラム期間中の食事。

食事が提供されない場合については食費を支給する。

(3) 日本国内の移動旅費

プログラム期間中の、自由行動時以外の国内移動旅費。

※上記以外の経費については参加者が負担することとする。

9. 海外旅行傷害保険

各参加者は、プログラム期間中に起こりうる傷害、疾病等の緊急時に備えて、各自の責任において、必ず海外旅行傷害保険に加入すること。

10. 通訳

公式プログラム期間中は原則として日本語とタイ語間の逐次通訳が行われる。

プログラム日程

日にち	時間	内容	宿泊先
12月2日(月)	08:15	スワンナプーム国際空港出発(TG672)	神戸プラザホテル 〒650-0022 神戸市中央区元町通 一丁目13-12 TEL:078-332-1141
	15:45	関西国際空港到着	
	17:00-	ホテルに移動	
	18:30	ホテル到着、チェックイン	
	18:30-19:30	ホテルにてオリエンテーション	
	19:30-20:30	夕食(参加者・ACCU)	
12月3日(火)	09:00-09:10	神戸市教育会館に移動(徒歩10分)	スマイルホテル徳島 〒770-0834 徳島県徳島市元町 1丁目2 TEL:088-626-0889
	09:30-10:00	ACCUによる訪問校紹介・日程説明	
	10:15-11:30	文部科学省による講義	
	12:00-13:00	昼食	
	13:00-16:15	灘中学校・灘高等学校訪問	
	16:15-17:00	学校からホテルに移動	
		夕食(個別)	
12月4日(水)	09:00	チェックアウト・ホテル出発	神戸プラザホテル 〒650-0022 神戸市中央区元町通 一丁目13-12 TEL:078-332-1141
	11:00-15:15	徳島県上板町立高志小学校訪問①	
	15:30-17:40	文化体験(藍染め)	
	18:20	ホテル到着、チェックイン	
12月5日(木)		夕食(個別)	神戸プラザホテル 〒650-0022 神戸市中央区元町通 一丁目13-12 TEL:078-332-1141
	08:10	ホテル出発	
	09:00-17:15	徳島県上板町立高志小学校訪問②	
	17:15-17:55	ホテルに移動	
12月6日(金)	19:30-21:30	徳島の先生たちとの夕食	神戸プラザホテル 〒650-0022 神戸市中央区元町通 一丁目13-12 TEL:078-332-1141
	08:25	チェックアウト、ホテル出発	
	08:55-13:40	徳島県立徳島北高等学校訪問	
	13:40	学校出発、神戸に移動	
	15:30-16:00	生田神社見学	
	16:10	ホテル到着、チェックイン	
12月7日(土)		夕食(個別)	神戸プラザホテル 〒650-0022 神戸市中央区元町通 一丁目13-12 TEL:078-332-1141
	10:00-12:00	プログラムレビュー会議	
	12:30-13:30	昼食	
	13:30-16:30	日タイ教育交流会	
12月8日(日)		夕食(個別)	神戸プラザホテル 〒650-0022 神戸市中央区元町通 一丁目13-12 TEL:078-332-1141
	07:15	チェックアウト、ホテル出発	
	11:00	関西国際空港出発(TG623)	
	15:45	スワンナプーム国際空港到着	

参加者リスト

	氏名	所属	職名	科目
T-01	ジッラダー・ジャンユーム	タイ教育省 国際協力局 二国間協力ユニット	Chief	-
T-02	ウライワン・シーティウオン	スックサー・ソンコ・チェン マイ学校	教諭	英語
T-03	ワンディー・ヌーポン	市立バーン・バーンニアオ学 校	教諭	英語
T-04	ターパニー・プーンシリ	ムアン・クラビー学校	教諭	英語
T-05	チャユット・ローカム	ベンジャマ・マハラート学校	教諭	英語
T-06	パカナパット・ジャルーンスック	アヌバン・チェンカム学校	教諭	英語
T-07	ナパット・ランカウオン	バーン・メーラムーン学校	教諭	キャリア教育
T-08	アディソン・ネティップ	ソップムーイ・ウィッタヤー コム学校	教諭	社会科
T-09	ターパニー・ウオンサワット	チャウアット・ウィッタヤー カーン学校	教諭	社会科
T-10	アッドウンロ・ゴータ	トン・ヨンマス学校	教諭	社会科
T-11	ルジナン・ポンナー	ナーク・ラセーン・スッ クサー学校	教諭	生物
T-12	ジャトゥロン・スワンセーン	サットリー・スィースリヨー タイ学校	教諭	生物
T-13	プラーサイ・ジェートサン	バーンパゴーク・ウィッタヤ ーコム学校	教諭	社会科
T-14	チャイワット・ソムギアットプラユーン	プラカノーン・ピッタヤライ 学校	教諭	社会科
T-15	カノックワン・ゲーオティンパー	タイ教育省 国際協力局 二国間協力ユニット	Foreign Relations Officer	-

プログラム関係機関

Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) /

文部科学省

3-2-2 Kasumigaseki, Chiyoda-ku, Tokyo 100-8959

〒100-8959 東京都千代田区霞ヶ関 3 丁目 2 番 2 号

TEL: +81-3-5253-4111 URL: <http://www.mext.go.jp>

Mr. NARA Satoshi

Director, International Affairs Division, Minister's Secretariat

大臣官房国際課 課長

奈良 哲

Mr. ARAI Tadayuki

Senior Specialist for Bilateral Education Cooperation, International Affairs Division,
Minister's Secretariat

大臣官房国際課 海外協力官

荒井 忠行

Ms. YONEOKA Aiko

Unit Chief, Office for International Strategy Planning, International Affairs Division,
Minister's Secretariat

大臣官房国際課 海外協力政策 係長

米岡 亜依子

Ms. YUMIOKA Haruna

Unit Chief, Office for International Planning and Coordination

Elementary and Secondary Education Policy Division, Elementary and Secondary
Education Bureau

初等中等教育局初等中等教育企画課専門官

(併) 地方教育行政係長 (併) 国際企画調整室国際企画調整係長

弓岡 美菜

Royal Thai Embassy / 在京タイ王国大使館

3-14-6 Kami-Osaki, Shinagawa-ku, Tokyo 141-0021

〒141-0021 東京都品川区上大崎 3-14-6

TEL: +81-3-5424-0652 Fax: +81-3-5424-0658

URL: <http://www.thaiembassy.jp/rte1/>

タイ教職員の訪問受入れにご協力いただいた方々

灘中学校・灘高等学校（12月3日）

〒658-0082 神戸市東灘区魚崎北町 8-5-1

TEL: 078-411-7234 <http://www.nada.ac.jp/>

校長 和田 孫博

徳島県上板町教育委員会（12月4日~6日）

〒771-1392 徳島県板野郡上板町七條字経塚4 2 番地

TEL: 088-694-6814

教育長 瀬尾 裕之

上板町立高志小学校（12月4日、5日）

〒771-1347 徳島県板野郡上板町高瀬 1108

TEL: 088-694-2815

<https://e-school.e-tokushima.or.jp/kamiita/es/takashi/html/htdocs/>

校長 武田 國宏

徳島県立徳島北高等学校（12月6日）

〒771-1153 徳島県徳島市応神町吉成字中ノ瀬 40-6

TEL: 088-698-8004 <http://tokushimakita.hs.tokushima-ec.ed.jp>

校長 長篠 俊文

Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU) /

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

1-32-7F, Kanda Jimbocho, Chiyoda-ku, Tokyo 101-0051 Japan

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-32-7F 出版クラブビル

TEL: 03-5577-2853 FAX: 03-5577-2854

Email: accu-exchange_ml@accu.or.jp URL: <http://www.accu.or.jp>

Mr. TAMURA Tetsuo

Director-General

理事長

田村 哲夫

Ms. SHINDO Yumi

Director, International Educational Exchange Department

国際教育交流部 部長

進藤 由美

Ms. TAKAMATSU Ayano (main person in charge of the programme)

Programme Specialist, International Educational Exchange Department

国際教育交流部 プログラム・スペシャリスト

高松 彩乃 (本プログラム主担当)

Ms. ITO Tae

Programme Specialist, International Educational Exchange Department

国際教育交流部 プログラム・スペシャリスト

伊藤 妙恵

Ms. FUJISAWA Yayoi

Programme Officer, International Educational Exchange Department

国際教育交流部 プログラム・オフィサー

藤澤 弥生

2. 実施内容・訪問記録

12月2日（月） 来日・オリエンテーション



オリエンテーションの様子

「タイ教職員招へいプログラム」の参加者 15 名は、2019 年 12 月 2 日（月）関西国際空港に到着し、宿泊先の神戸プラザホテル会議室で行われたオリエンテーションに参加した。

はじめに、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）国際教育交流部の進藤由美部長が、「日本の学校や先生方との交流を深めていただき、それぞれの目的が達成されますことを心から祈念しております」と参加者に歓迎の挨拶を述べた。続いて随行する ACCU 職員が紹介され、最後に、担当職員よりプログラム日程の説明や滞在ガイダンス等が行われた。

12月3日（火）午前 文部科学省による講義



文部科学省 弓岡美菜氏による講義



全員で集合写真

12月3日（火）午前、神戸市教育会館にて、文部科学省による「日本の初等中等教育の概要」の講義が行われた。講師は、文部科学省初等中等教育局初等中等教育企画課専門官の弓岡美菜氏が務めた。

講義で扱われたトピックは下記のとおりである。講義の後には質疑応答が行われた。

- ・日本の学校体系
- ・学校数、児童生徒、教員数
- ・義務教育制度の概要
- ・教育行政における国・都道府県・市町村の役割分担
- ・義務教育費国庫負担制度について
- ・学習指導要領
- ・「学力の三要素」と「生きる力」について
- ・学習指導要領の変遷
- ・学習指導要領改訂の考え方
- ・主体的・対話的で深い学びの実現（「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善）について
- ・教科書制度
- ・教育委員会制度の仕組みと趣旨
- ・「学校」の在り方の国際比較
- ・日本の学校教育の特徴
- ・新時代における先端技術を効果的に活用した学びの在り方
- ・教育現場で ICT 環境を基盤とした先端技術・教育ビッグデータを活用することの意義
- ・先端技術・教育ビッグデータの効果的な活用と ICT 環境の整備について取組むべき方策

Q&A（抜粋）

Q：アクティブ・ラーニングの達成度はどのように測るのか。

A：これから進めていくので、評価の実践がまだ蓄積されていない状況である。基準の一つとしては、意欲・関心・態度を教員が見るが、それを数値化することは難しい。入学試験においては、学科試験のほかに内申書による評価もされることがある。内申書では点数のみならず教員からのコメントによる評価を見ることができる。

Q：「知・徳・体」を重視しているという話があったが、特に「徳」は評価が難しい部分だと思う。タイでも内申書のようなもので評価しているが、教員の好みや児童・生徒の家庭背景などが評価に影響を与えてしまうことがある。点数で測り切れない部分を正當に評価するためにどのようなことを行っているか。

A：道徳が教科化されてから、どのように評価をするかというのが問題になった。以前は「活動」に位置付けられ、シビアな評価はなかったが、教科化をするにあたり検討を重ねた。現在は、数値による評価をせずに、コメントで評価する形式を続けている。答えが必ずしも一つではない問題について議論する科目であることがもう一つのポイントで、特定の規範が正しいと教え込むというよりも、多様な価値観で議論する過程を重視している。議論における貢献度を含め評価を行うが、教員の負担は増大している。

12月3日（火）午後 灘中学校・灘高等学校訪問

訪問スケジュール

時間	内容
13:30	学校到着
13:30 -14:25	挨拶・記念品贈呈・学校紹介・質疑応答
14:40 -15:30	授業見学・施設見学
15:45 -16:15	質疑応答
16:25	集合写真撮影、学校出発



校長の和田孫博氏に記念品を贈呈する訪問団長

学校の特徴

1927年に設立された中高一貫の男子校であり、生徒の自由と自主性を重んじるため、細かい校則を設けず、生徒自身が責任を持って自分の行動を律することを求めている。

毎年東京大学に100名近い進学者を送り出す進学校であるが、一方でクラブ活動、生徒会活動も盛んである。クラブ活動では高校生が中学生といっしょに活動したり、高校生が中学生に教えたりする機会が多く、先輩が後輩に与える影響力は大きい。二大行事である文化祭・体育祭は中高合同で行い、生徒会を中心に各学年から募集したスタッフが協力して、生徒主体で創り上げている。

1学年あたり4クラスあり、8名の教員によるグループが6年間同じ学年を担当する。高校からの入学者もいるため、高校は1クラスあたりの人数が中学に比べて多くなる。

Q&A（抜粋）

Q：1クラスの人数が非常に多く、驚いた。マネジメント上で問題はあるか。また、英語の授業においては少人数制を採用することが多いと思うが、会話の授業ではネイティブの先生とペアで授業を行っているのか。

A：（見学したクラスは）58名の生徒がおり、人数が多いが、それによって苦勞を感じたことはない。会話の授業は多くない。生徒が発言する機会を増やそうとすると、人数が多いことにより苦勞があるかもしれないが、まずは語彙・文法など、読んだり聞いたりする能力の土台を作らなければ、話すところまで到達しない。インプット能力を養うための授業であれば、100名でも変わらない。コミュニケーションの授業では、二十数名に分け、そこに一人ずつ教員がついて教えている。

Q：SDGsについて、例えば社会科の授業の単位として教えたり、総合的な学習の時間で扱ったりなど、どのように教えているか。

A：例えば公民科では、Citizenship Educationを中心に扱っている。幅広く教えるというよりも教員の専門性により、一つのことを深く学ぶ。（ジェンダーに関心の高い教員が、SDGsの中でもGender Equalityについて扱うなど）

Q：多様な性のあり方について考える機会が増えている現在の世の中の状況が、学校に影響を与えていることがあるか。

A：男子校の中でも、女性的な個性を持つ生徒は昔からいる。性のあり方に限らず、とがった部分を持つ生徒が多い。小学校時代から飛びぬけて勉強ができた子たちばかりで、妬みの対象となる経験をしてきた子も少なくなく、互いの個性を認め合う雰囲気がある。

12月4日（水）徳島県上板町立高志小学校訪問①

12月4日から6日までは上板町教育委員会による受け入れによりプログラムを実施した。特に4日から5日にかけては、上板町立高志小学校を中心に学校・教育委員会・地域の方々との交流や地域文化の体験を行った。

訪問スケジュール

時間	内容
11:15	学校到着
11:15-11:40	教育委員会教育長挨拶・訪問団挨拶・記念品贈呈
11:45-12:45	昼食（学校給食）
13:00-14:15	学校経営説明・質疑応答
14:30-15:30	歓迎会（阿波踊りグループ「虹」の踊り鑑賞・体験）
15:45	学校出発



上板町教育委員会・高志小学校との集合写真

学校の特徴

1874年に設立された公立小学校。2017年度からエシカル消費者の育成を図る消費者教育を中核にして、SDGsの達成に向け教育活動を展開している。同校の教育活動の最大の特徴は、地域関係者、企業、NPO、行政機関等と連携し、体験・交流活動を基盤にして、児童が主体的・探究的に学び、地域創生に寄与する学習活動が全学年で行われていることである。さらに、グローバル教育、食育にも先進的に取り組み、それらの実践は文部科学省からも評価されている。ICT環境を整備し、プログラミング教育にも先進的に取り組み、未来社会に対応できる資質・能力を育てている。

「子どもも・教師も明日も学校に来たい」をめざし、誰もやったことがない事にチャレンジしようを合言葉にしている学校である。

Q&A（抜粋）

Q：SDGs達成のための活動として、食育に力を入れている理由を知りたい。

A：SDGsの目標12「つくる責任、つかう責任」をターゲットとしている。コミュニティの中心が農業であり、地産地消を通して地域を活性化させたい。また、消費活動を変えれば世界を変えることができる。例えばファストファッションの背景に、途上国等における安価な賃金での労働があることを想像できる子どもを育てたいと考えている。「消費活動を通して誰一人取り残さない」を合言葉にしている。

Q：子どもが給食のメニューを考えるという活動について、地域の様々な分野との連携があると思うが、今後の展望や計画について知りたい。

A：メニュー作りは2019年度からの取り組みであるが、10年後には日本中の学校にこうしたスタイルを広げたい。現在、上板町役場、徳島県庁、文部科学省とコラボレーションをしている。学校の取り組みを食品ロス削減の全国大会で発表する機会があったが、複数の企業、NPO、自治体が興味を示している。サポートしてくれる企業とも連携をとって推進している。

12月4日（水）午後 藍染め体験

概要

徳島県上板町を中心に、藍の栽培、染料となる薬(すくも)造り、染色、製作を一貫して行っている Watanabe's を訪問し、渡邊健太氏に藍染めについて説明を受けたあと、それぞれが T シャツを染める体験を行った。また、体験後には薬（すくも）を発酵させている様子を見学した。

なお、同日に訪問した上板町立高志小学校では、学校経営説明の中で同校の 5 年生児童が地域の産業である阿波藍の 6 次化学習を行っていることが紹介された。参加者にとっては、徳島の伝統文化を知るとともに、地域の振興や環境保全に対する学校の取り組みについても学ぶ機会となった。

染めた T シャツは Watanabe's にて最終的な仕上げを施され、翌日の「おもてなし昼食」の場で参加者全員に手渡された。

参考：Watanabe's ウェブサイト <https://www.watanabezu.com/>



渡邊氏による藍染めの説明



薬（すくも）発酵の様子



T シャツを染める訪問団



完成した T シャツ

12月5日（木）徳島県上板町立高志小学校訪問②

訪問スケジュール

時間	内容
9:00	学校到着
9:30-10:15	授業見学（音楽、理科（実験・ドローンの2クラス））
10:40-12:00	タイ教職員による交流授業（5年・6年）
12:30-14:15	おもてなしランチ・茶道体験
14:40-15:25	研究授業（5年算数）見学
15:40-17:00	授業研究会に参加、質疑応答
17:00	学校出発



タイ料理に含まれている食材や調味料を当てるカードゲーム（5年生交流授業）

交流授業の様子

15名の参加者が二手に分かれ、小学校5年生と6年生の教室でそれぞれ授業を行った。5年生の教室では「食」を切り口にタイの多様な文化が紹介され、タイの食べ物にまつわるカードゲームで食文化を学んだ。青色の花を入れて、色を付けて炊いたお米など、見慣れない料理が次々登場し、ゲームは大いに盛り上がった。6年生の教室では、タイを4つの地域に分けて、それぞれの地域の文化の特徴を体験を交えて学んだ。様々なスタイルの民族衣装や伝統遊びの道具などが記念として学校に贈られ、6年生たちは早速他の学年の子どもたちにタイのことを紹介するコーナーを作った。「インターネットで検索してすぐに分かるようなものとは一味ちがうタイの紹介をしたい」という参加者の想いが伝わる授業であった。



6年生がつくったタイの文化紹介コーナー

Q&A（抜粋）

Q：日本の学校では伝統文化や宗教、また多文化共生や異文化理解についてどのように教えているか。

A：日本の教育でこれまで重要視されてこなかった部分。最近やっと、道徳や総合的な学習の時間等を通してムーブメントが起こり始めている。このようにタイと日本の教職員が共にいる今の状況は多文化共生そのもの。

Q：生活や総合的な学習の時間に力を入れている様子や、児童の幸福度が高いことがうかがえた。そうした環境で学んだ子どもたちが、やがて競争志向の社会に放り込まれたときにどのように対応していけると考えているか。

A：総合的な学習の時間では、地域の中での素敵なものを探して発信するなど、様々な問題を自分事として考えさせたり、自分がこう生きていきたいという思いを積み重ねていく学習をしている。生活や総合にも力を入れているが、一番大切にしているのは日々の国語・算数・理科・社会の授業である。子どもたちはSDGsで言われている「社会を変えるための学力」を身に付けているので、社会に出ても対応できると考える。

12月5日（木）おもてなしランチ・茶道体験

12月5日（木）の昼食は、高志小学校近くの南老人集会所にて「おもてなしランチ」が提供された。徳島県神山町の「株式会社フードハブ・プロジェクト」のシェフの方による徳島県産の食材を使った料理を、学校や地域の方々と同じテーブルで会話を楽しみながらいただいた。タイ教職員は「そば米汁」などの徳島の郷土料理を満喫した。

昼食後には部屋を移動し、上板町の稲井ご夫妻による抹茶のおもてなしを受けた。掛け軸や季節の花で彩られた和室で抹茶と和菓子进行いただき、ゆったりとした時間を過ごした。



フードハブ・プロジェクトの料理人の方によるメニューの紹介



おもてなしランチのメニュー



抹茶のおもてなし



稲井ご夫妻を囲んで

12月6日（金）午前 徳島県立徳島北高等学校訪問

訪問スケジュール

時間	内容
9:00	学校到着
9:00 - 9:10	挨拶・記念品贈呈
9:10 - 9:25	学校概要説明
9:25 - 9:50	校内見学
10:00 - 10:50	授業見学
11:00 - 11:40	質疑応答
11:45 - 12:45	休憩・評価表記入
12:50 - 13:20	高2クラスと昼食交流
13:40	集合写真撮影、学校出発



校舎前での集合写真

学校の特徴

同校は創立23年目で、目指す校風は「清新はつらつ」である。普通科と国際英語科の2つの学科があり、普通科においては「コース制」「自由選択科目」を導入して幅広い進路選択が可能となっている。1,000名近い生徒が勉強だけでなく学校行事や部活動、ボランティア活動に積極的に取り組み、サッカー部・空手道部・陸上部・柔道部・放送部・華道部等、全国大会に出場する部活動もたくさんある。

短期の海外語学研修やタイを含む海外姉妹校との交流をはじめとした国際理解教育、電子黒板やICT機器を活用した教育、総合的な学習の時間におけるSDGsの視点からの探究活動などを通し、グローバルな視点を持った、さまざまな分野で活躍する人材の育成を目指している。

Q&A（抜粋）

Q：学級経営や授業を行う上での課題と、その解決方法について教えてほしい。

A：1クラスの人数が多く、効率性の面や達成度を測るうえで障害となりうる。グループワークやペアワークを増やし、一人当たりの発言の機会を増やすことや、生徒の様子をよく見られるようにすることで対応している。（英語）

A：週に2コマある授業のうち1コマは実習を行っている。教員一名で40人の生徒を指導するため、機器のトラブル等が発生すると大変。生徒間にスキルの差があるので、助け合いを促している。（情報）

Q：海外での研修や留学に力を入れているという話があったが、留学する人数や留学先について知りたい。

A：長期の留学となると、一年に2名程度である。海外の大学への進学は、3年間で5名くらい。行先はイギリス、アメリカ等の英語圏のみならず、オランダや韓国の大学に進学するケースもある。

Q：見学した英語の授業では、読解力やプレゼンテーション能力など、一つの授業で複数の能力を伸ばすことを目的としているようであった。異文化理解の要素なども授業の中で取り入れているのか。

A：異文化理解に関しては、国際英語科では、1年生で全員が短期（2週間）のオーストラリア研修に参加することになっている。現地で様々な人と会うことは、日本人としての考えを養う機会にもなる。また、定期的なものとは不定期のものがあるが、英語圏を中心に校内で国際交流の機会があり、国際英語科の生徒を中心に交流を行っている。

12月6日（金）午後 生田神社見学

徳島北高等学校を訪問後、訪問団は神戸へと移動し、三ノ宮駅近くの生田神社を見学した。手水やお参りの作法と一緒に確認した後は自由見学の時間を持ち、各自で参拝をしたり、新年に向けて飾られた大きな絵馬を見るなどした。様々な種類のお守りを熱心に選ぶ姿も見られた。



神社前での集合写真



寒さをこらえながら手水の手順を確認

12月7日（土）午前 プログラムレビュー会議

プログラム6日目となる12月7日（土）の午前中、神戸市教育会館にてプログラムレビュー会議を開催した。訪問団15名に加え、本プログラムにおける訪問受入れ協力校の教職員、2019年度の派遣プログラムでタイを訪問した教員、過去の日タイ教育交流会に参加した教員などが参加し、1週間のプログラムを振り返るとともに、プログラム終了後の交流や教育活動への活かし方について考える時間を持った。また、会議の最後にはタイ教職員にプログラム修了証が手渡された。

当日のプログラム内容については下記の通りである。

時間	内容
10:00-11:00	第一部 2019年度招へいプログラムの振り返り
11:10-11:45	第二部 交流プログラム後の日タイ交流の展望
11:45-12:00	第三部 タイ教職員へのプログラム参加証明書授与



<第一部 振り返り>

最初に ACCU から、プログラム日程全体を写真スライドおよび動画を使って出席者全員に共有した。

その後、タイ教職員2~3名と日本側参加者1~2名で構成されたテーブルごとにタイ教職員が1週間のプログラムの中で最も印象に残ったことを話し、更に参加者全体で共有する時間を持った。地域と学校の双方向的な協力関係や、複数の学校で図書館に置かれていたSDGsを分かりやすく学ぶ本が置かれていたこと、ICTを活用した子どもの幸福度の測定などのトピックが挙げられた。

<第二部 その先へ>

第二部の冒頭では、2019年度タイ政府日本教職員招へいプログラムに団長として参加した岡山市立三軒小学校教諭の浅野智宏氏より、交流プログラムを教育活動にどう生かしているか、また教育交流を行う上での工夫などについて発表があった。具体的な交流事例や子どもたちの反応、SNS・ぬいぐるみなどを活用した交流など、参加者が今後の活動を考える上でのヒントを得ることができた。

発表後は、各自が「プログラム後に挑戦したいこと」を付箋に書き、グループ内で共有した。訪問校の実践事例を導入する、出会った先生との交流を続ける、所属する学校の教員や児童生徒に自分の経験を伝えるなど、それぞれが自分の中でのプログラム終了後の目標を確認する時間となった。





<第三部 プログラム修了証授与>

1 週間のプログラムを終えた参加者一人ひとりに、ACCU 理事である高坂節三氏（公益財団法人日本漢字能力検定協会代表理事）を代理し、同協会常任理事の高瀬康雄氏より参加証明書が手渡された。

その後集合写真を撮影し、プログラムレビュー会議を終了した。



12月7日（土）午後 日タイ教育交流会

午前中にプログラムレビュー会議を終えて、午後は同会場で日タイ教育交流会を実施した。交流会の日本側参加者は公募で広く募っており、教職員のみならず大学院生やタイからの交換留学生（高校生）など幅広い層が参加した。

プログラム内容については下記の通りである。

時間	内容
13:35-13:50	自己紹介
13:50-14:50	互いの学校文化を知るアクティビティ
15:10-16:10	テーマ別ディスカッション
16:10-17:00	まとめ・自由交流



<自己紹介>

自己紹介のセッションは、席を立てて部屋の中を歩き回る形式で行った。配布された資料に載っている日本とタイの白地図に自己紹介をした相手の名前と出身地を書き込みながら、15分間で日タイ関係なくできるだけ多くの人と話をすることを目指した。

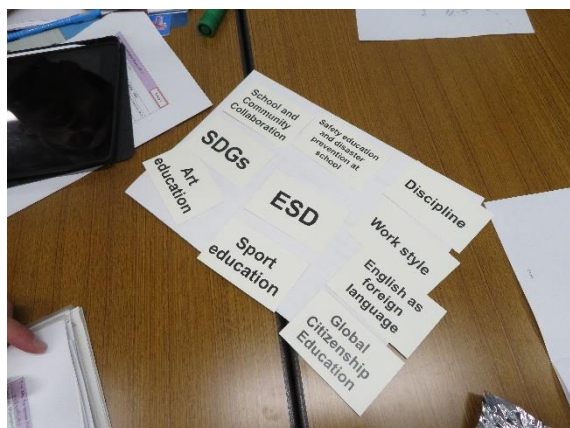
<互いの学校文化を知るアクティビティ>

交流会には、所属する学校の所在地や出身地に至るまで、多様性に富んだ参加者が日タイから集まった。自己紹介後にグループ単位で行ったアクティビティでは「互いの学校文化を知る」と題し、給食（学食）や学校行事、児童生徒の興味関心、放課後の活動にいたるまで様々なテーマで各自の学校を紹介しながら、タイの学校・日本の学校について関心と知識を深めていった。

参加者にはあらかじめ、自分の学校を紹介するためのビジュアル資料（写真やパンフレット等）の持参をお願いし、それらの資料を使いながらそれぞれの学校の中にある文化について学びあった。

本プログラムはタイ教職員が日本を訪問するという形式上、タイ教職員の所属校について詳しく知る時間は設けられていないことから、アクティビティはタイ教職員からの紹介にやや比重を置いた形で実施された。日本側の参加者に向けて自分の学校の良い点、誇らしい点を紹介しているタイ教職員はとても嬉しそうに見えた。





<テーマ別ディスカッション・まとめ>

アクティビティを終えて互いの学校の状況についてある程度の情報を共有した段階で、テーマ別ディスカッションへと移った。参加者から事前に提出された申請書に書かれた興味・関心分野のカード一式が各グループに配布され、カードを参考にしながら意見交換や課題の共有を行った。

SDGs の達成や ESD、GCED など世界的な共通課題の他、英語教育や地域との協働など日々の教育活動の中で直面している課題について、限られた時間ではあったが直接意見を交わし合った。

まとめの部分では、国は違っても同じ課題に向き合っている教職員同士が出会ったことの大切さと、プログラムが終わった後も続く関係を築いていきたいという希望が語られた。多くの教職員がその場で連絡先を交換し、タイ教職員が帰国した後も早速連絡を取りあっているようで、これからの展開が期待される。



3. 成果と今後への活用

タイ教職員

受入れ機関

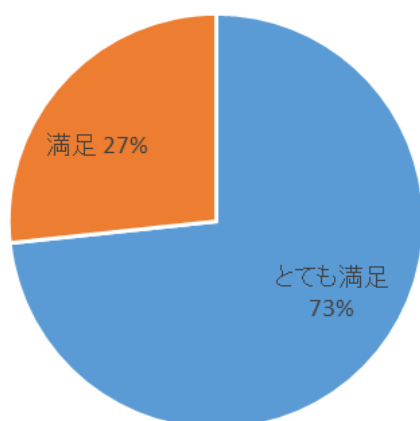
事業担当者

1. タイ教職員

※理由・意見等の記述部分は、一つの設問に対してランダムに3名分を抽出（原文はタイ語、ACCU 訳）

■質問 1. プログラム全体の満足度

有効回答数：15



T-01 ジッラダー・ジャンユーム（満足）

プログラムは内容が適切で有益であり、特に小中学校の教育制度に関する知識を得る事ができた。特に優れた学校を訪問校として選定していたことや、日本人とタイ人の間で楽しく会話をして意見交換できる機会を設けていたことは、タイでのプログラム実施のための参考になった。ただ、スケジュールが詰まりすぎていて休む時間が少なく、疲れたことも含めてこの満足度とした。

T-03 ワンディー・ヌーポン（とても満足）

日本を視察し文化交流をする機会を得ることができ、日本の文化・暮らしぶり・教育システムについて学び、日本の先生との交流をし、授業や授業研究の見学を通して日本の先生の教授法を知ることができた。

T-15 カノックワン・ゲーオティンパー

（満足）

タイと日本の教育面の交流のための非常に有益なプログラムである。タイ人と日本人の文化・視点・意見の違いについても知ることができ、日本の学校での学習の良い点や特徴についてタイ人教師が学ぶことができ、同時に日本人教師もタイ人教師と意見交換をして提案を受けることができた。

■質問 2. 参加目的は何か

T-04 ターパニー・プーンシリ

- ・更なる学習活動へのインスピレーションを得るため。
- ・日本の学校の教育活動における技術を学ぶため。
- ・SDGs や持続可能な開発について理解し、自身の学校に適用するため。

T-06 パカナパット・ジャルーンスック

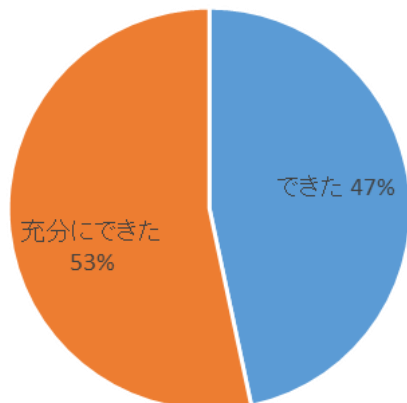
- ・世界観を広げ、経験や知識を積み、日本での各訪問先について学ぶため。
- ・タイの地方文化を日本の方に知ってもらうため。
- ・得られた知識を自国の教育界に役立てるため。
- ・児童生徒が小さい頃から持続可能性に配慮し、価値のある大人になるように SDGs に沿った学習を発展させるため。

T-08 アディソン・ネティップ

日本の教育の良いアイデアを自身の学校での学習に生かし、国内および国外のネットワークを構築するため。

■質問 3. 参加目的は達成できたか

有効回答数：15



T-01 ジッラダー・ジャンユーム（できた）
特に優れた学校を訪問校として選定することや、知識を提供するための講義を実施すること、交流を実施することなど、日本側の運営について知ることができた。

T-04 ターパニー・プーンシリ（できた）
日本の先生から得られた経験を自身の学校に生かし、教師としての能力をさらに高めるため、全ての活動に一生懸命に参加した。

T-09 ターパニー・ウォンサワット（できた）
実際に自身の活動に適用できるような新しい知識や発見を統合した。ESD・GCEDの学習に関しては自身の観点が変わり、方向性が明確になった。

■質問 4. 当初の目的の他に、このプログラムから得られたものはあるか。どのようなものを得られたか。

T-01 ジッラダー・ジャンユーム
温かく真摯な歓迎をしてくださった ACCU 職員、学校、生徒達に感動した。

T-04 ターパニー・プーンシリ

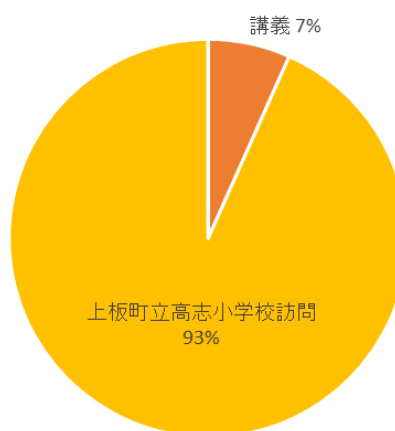
総合学習や SDGs 達成のための活動の実施プロセスを理解し、学習活動の実施に適用することができた。

T-06 バカナパット・ジャルーンスック

- ・良い人間関係が得られた。美しい伝統文化を見られた。
- ・クラス経営や学習ツールの模範を見ることができた。
- ・国籍も言葉も違うがビジョンを共にする友人ができた。
- ・校内の展覧会・展示物・ゴミ分別に関するアイデアが得られた。

■質問 5-1. 最も有意義な活動は何か

有効回答数：15



T-01 ジッラダー・ジャンユーム（講義）

- ・日本の教育に関して詳細に紹介し、質問に詳しく答えていただいたので、全体像を理解できた。
- ・講義のスライドが素晴らしく詳細に記載されており、またタイ語に翻訳されていたため分かりやすく、持ち帰ってさらに学ぶことができた。
- ・日本の教育というテーマで講義を聞くことで自身の仕事に役立った。

T-03 ワンディー・ヌーポン（上板町立高志小学校訪問）

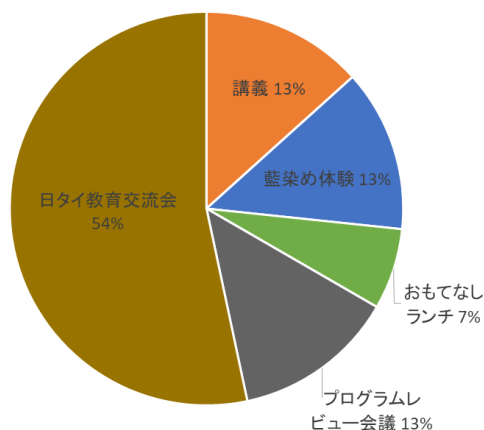
授業見学、交流、日本人教師との学び合いができ、学校経営についても知ることができた。日本の児童に文化授業を行うことができ、また感動的な歓迎があった。日本の伝統的な藍染や茶道を体験し、日本人の暮らしぶりに触れることもでき、日本の方々との夕食会では別れの時に感動した。この事は、タイ人教師と日本人教師の良い関係の継続、ネットワークの構築、今後の学び合いの継続に繋がった。

T-06 パカナパット・ジャルーンスック（上板町立高志小学校訪問）

学習者の生活や様々な知識に配慮したオーセンティックな学び、効率的で良い学習の実態を見ることができた。児童が持っている情報を自身で又はグループで話し合う時に、子どもたちに学びが生まれ、知識や情報を分析・分類して新しい知識を作り、それを適宜応用し、生きていくための持続的な学びとなっていると感じた。

■質問 5-2. 2 場目に有意義な活動は何か

有効回答数：15



T-03 ワンディー・ヌーポン（講義）

日本の教育制度に関する知識を得ることができ、知・徳・体という日本の教育政策について理解できた。

T-06 パカナパット・ジャルーンスック（日タイ教育交流会）

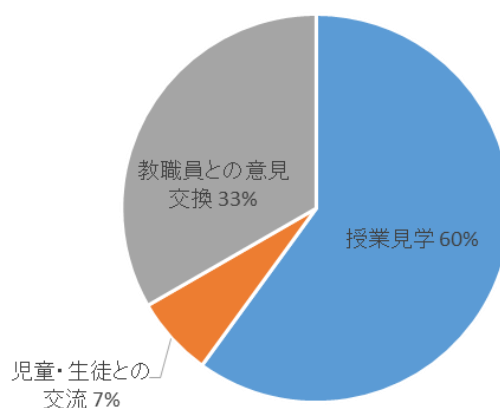
- ・効率的に交流できる一つの方法である。
- ・学習者のための質の高い学びを実現するための連携体制が構築できた。
- ・児童生徒の改善を通じた教員のキャリア開発ができた。
- ・一緒に学ぶことができた。

T-13 プラーサイ・ジェートサン（講義）

- ・教育実施における考えについて明確に理解できた。
- ・質問に対して的確に、7 日間のプログラムの内容と関連付けて回答してくださった。

■質問 6. 学校訪問で最も有意義な活動は何か

有効回答数：15



T-03 ワンディー・ヌーポン（授業見学）

日本人教師の指導を見学し、児童・生徒の反応や明るさ・愛らしさを見ることができ、日

本の学校生活や学びの雰囲気を知ることができた。

T-09 ターパニー・ウォンサワット（授業見学）

クラス経営と授業の実施は教員の主な仕事であり、教員にとって一番重要であるということを学び、自身の指導の改善に役立てることができた。

T-14 チャイワット・ソムギアットプラユーン（教職員との意見交換）

教員のマネジメントシステムや指導システムを見ることができ、問題点や疑問点も聞くことができたので理解が深まった。

■質問 7. ほかにどのようなプログラムがあるとよいか

T-03 ワンディー・ヌーポン

フィールドトリップ活動を増やし、日本の有名な場所に訪問団を連れていく。

T-05 チャユット・ローカム

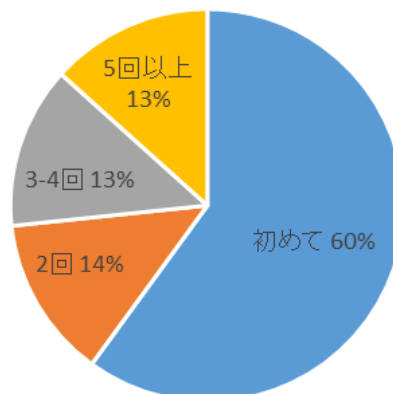
スケジュールが結構詰まっていたので、プログラム中に 1 日程度で観光地を巡る機会を作って欲しい。

T-09 ターパニー・ウォンサワット

より学びを充実させるために教員や児童・生徒と話す時間をもっと増やしてほしい。今回、話す時間が短かったため疑問が残ったまま終わったことがあった。

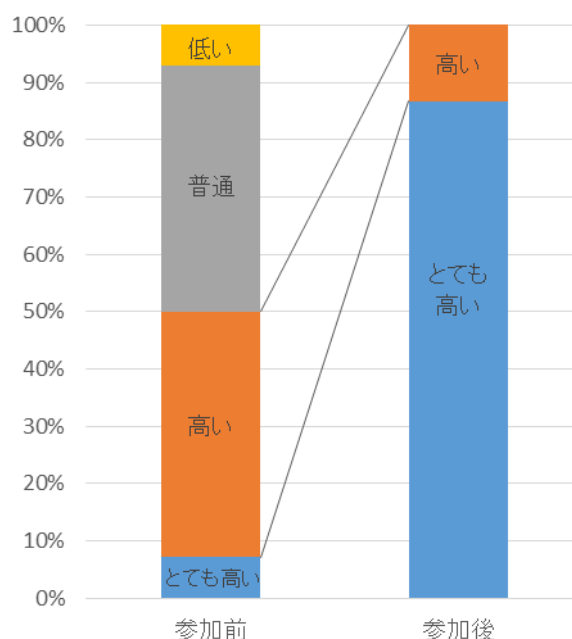
■質問 8. 来日するのは何回目か

有効回答数：15



■質問 9. 日本の教育全般への関心・理解度の変化

有効回答数：15



T-05 チャユット・ローカム（普通→とても高い）

大学時代に選択科目として日本語を勉強し、言語も文化もある程度学んだが、今回実際に日本に来て、温かい歓迎やケアを受け、伝統芸能の鑑賞や藍染め体験や神社訪問をし、

教育面の知識を共有したことなどから、日本に対してますます感動した。

T-06 パカナパット・ジャルーンスック（普通→とても高い）

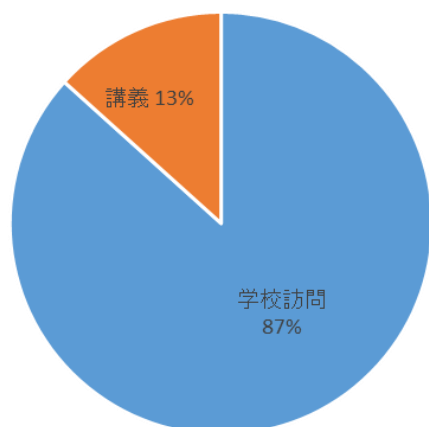
知識を増やす素晴らしい機会が与えられ、プログラム中の活動内容が興味深いものであったため、日本の教育への関心と理解度が高まった。

T-08 アディソン・ネティップ（高い→とても高い）

プログラム参加前も日本の教育に関する関心と理解はある程度あったが、プログラムに参加したことによって日本の課題に関する関心が生まれ、日本の教育に関する理解が深まり、様々な新しい知識が得られた。

■質問 10. 日本の教育の理解に役立った項目

有効回答数：15



T-03 ワンディー・ヌーボン（学校訪問）

プログラムで学んだ持続可能な開発のための教育、質の高い教育、平等で皆に行き届く教育の担保、生涯学習の推進等に関する UNESCO の目標について、今後効率的に生徒に指導をしたいと思う。

T-05 チャユット・ローカム（学校訪問）

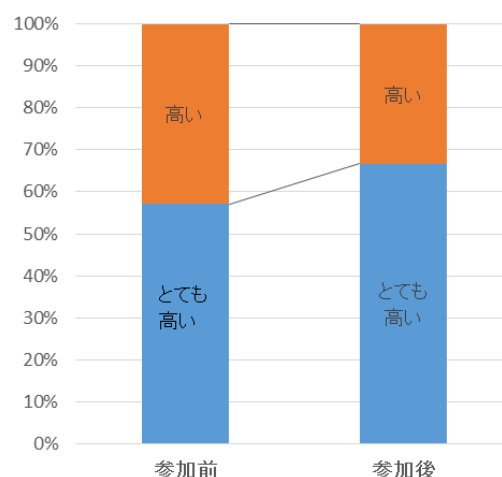
指導、指導研究、学習者の反応、管理職の学校経営、教師陣の役割、SDGs・ESD を重視した総合学習、プロジェクト型学習などを見ることができた。

T-09 ターパニー・ウォンサワット（その他）

講義により教育の全体像を知ることができた。一方、学校訪問では教育方法と教育の実態を見ることができ、授業見学によってその姿がより明らかになった。

■質問 11. 国際理解教育や ESD への関心・理解度の変化

有効回答数：15



T-07 ナパット・ランカウォン（高い→とても高い）

今回の視察を通して、ESD は地方から始め、全ての関係者が参加する必要がある、地産地消によりコミュニティを強くすることができるということがわかった。

T-10 アッドウンロ・ゴータ（普通→とても高い）

参加前は ESD に関する理解が表面的なも

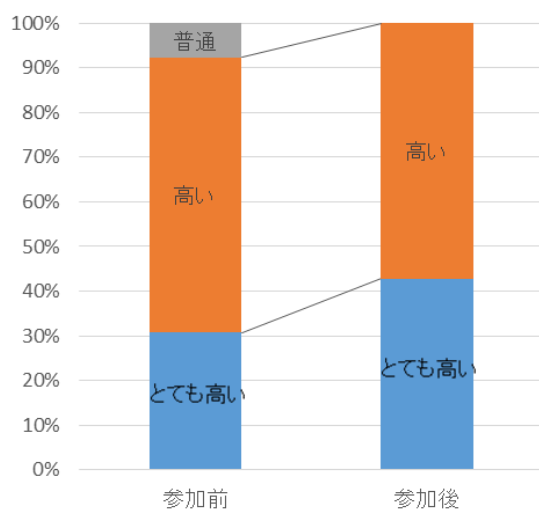
ので、ESD の考えや原理をどのように適用するのが想像できなかったが、参加後は ESD をカリキュラム・授業・仕事・住民参加等に適用する方法を知ることができ、明確な ESD を行い、ESD の原理を自身が行っている活動と繋げる新しいアイデアを得ることができた。

T-14 チャイワット・ソムギアットプラユーン（普通→とても高い）

様々な ESD の実施プロセスについてより理解できるようになり、自身の指導に適用できるようになった。

■質問 12. 日本に対する理解度の変化

有効回答数：13



T-07 ナパット・ランカウォン（普通→とても高い）

以前は日本には美しい文化がもともとあるのだと思っていたが、自分の目で実際に見たところ何もかもが美しく、それは日本人が皆、日本の伝統文化を保護しようとしているからだということがわかった。

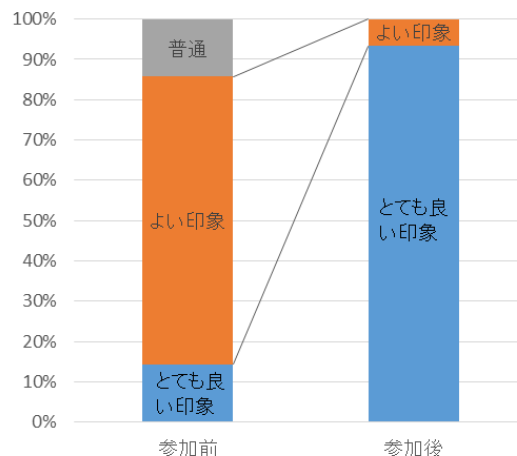
T-10 アッドウンロ・ゴータ（普通→高い）
日本に来る前は日本文化に関することを少ししか知らなかったが、実際に自分の目で日本を見て日本人と一緒に生活してみると、日本人の愛らしさがより一層感じられた。今回は短い期間の滞在だったので、日本を知るには十分でないかもしれないので、また機会があったら日本に帰って来たい。

T-12 ジャトゥロン・スワンセーン（普通→高い）

日本人は秩序正しく時間に正確だというのが参加前の印象だったが、実際に自分の目で見て学んだところ、日本人は社交的で、体系的に学び、綿密な計画を立てて仕事を行うことがわかった。もしもっと長い期間滞在する機会があれば、もっと日本人をよく知ることができると思った。

■質問 13. 日本の全体的な印象の変化

有効回答数：14



T-07 ナパット・ランカウォン（普通→とても良い印象）

参加前は日本人も同じアジア人だと思っていたが、参加後は、日本人はとても愛らしく、連帯責任感が高く、他人にとっても遠慮し、とても規律正しく、時間を厳守し、非常に美しい文化を持っていると思うようになった。

T-14 チャイワット・ソムギアットプラユーン（普通→とても良い印象）

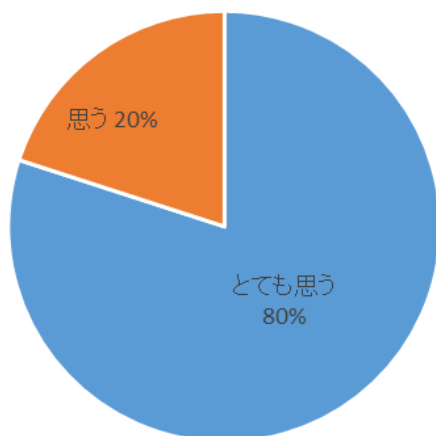
日本人と知識や意見の交換ができ感銘を受けた。

T-15 カノックワン・ゲーオティンプー（良い印象→良い印象）

日本人や日本の色々なところが好きになった。このプログラムでは都市部の学校だけでなく、地方の学校も見ることができたため、日本の教育に関して、様々な視点で学ぶことができた。

■質問 14. 日本の教育・文化を更に学びたいか

有効回答数：15



T-04 ターパニー・プーンシリ（とても思う）
時代が変われば教育に関する方針も変わる

ので、今後も引き続き学び続けたい。また、まだ学んでいない日本の文化の色々な面を学びたい。

T-11 ルジナン・ボンナー（とても思う）

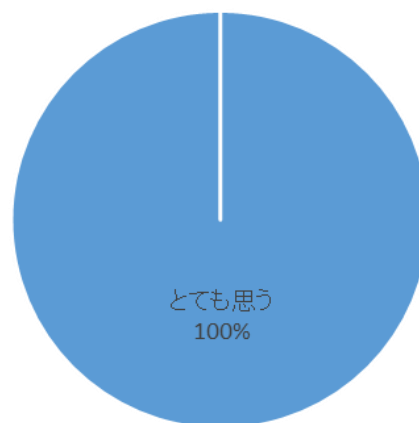
日本の方と交流することでもっと色々と学べると思うので、教育に関する意見交換をしたいと思う。また、もしまた日本に来る機会や、もっと長い期間日本に滞在できるプログラムがあれば、今後は日本の学校で実際に教えてみたい。

T-13 プラーサイ・ジェートサン（とても思う）

3つの学校の活動事例を見たことによって、ESD や GCED に関する教育方針についてより学びたいと思うようになった。

■質問 15. プログラムで体験したことを児童・生徒や同僚に報告しようと考えているか

有効回答数：15



T-01 ジッラダー・ジャンユーム

今回のプログラムはとても有益なものであり、教育省の副大臣にプログラムの報告を

行い、タイでのプログラム開発のための提案も同時に行いたい。

T-05 チャユット・ローカム

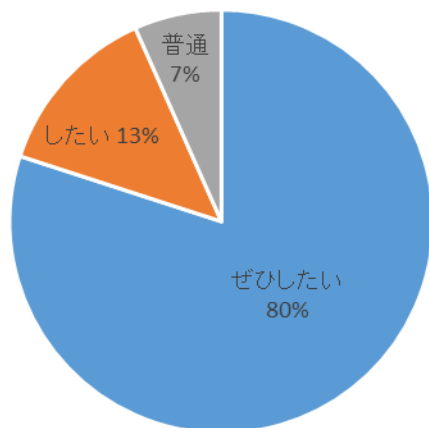
私の学校の同僚、管理職、児童・生徒に、今回の経験を共有したい。同僚向けには、日タイ教育交流会で、タイを訪問した日本の教員が経験をシェアしてくださったように、月例会議で今回のプログラムのポイントをシェアしたい。

T-07 ナパット・ランカウォン

得られた経験を共有しないのは非常にもったいないので、日本がどのように良かったのかを生徒・同僚・家族等にシェアしたい。

■質問 16. 今回の体験を自分の教育活動に活用するか

有効回答数：15



T-03 ワンディー・ヌーポン (ぜひしたい)

日本の学校で見たことを自身の指導に活用する。学習に配慮した教室の内装や学校全体の活動について、管理職に提案する。

T-11 ルジナン・ポンナー (ぜひしたい)

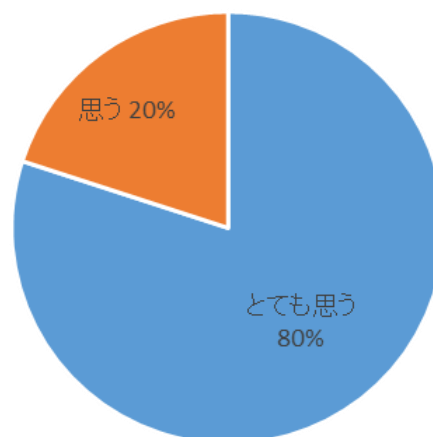
- ①SDGsの17の目標に沿った現行カリキュラムの良い点と悪い点を分析し、改善計画を立てる。
- ②学校カリキュラムマネジメント委員会の会議で提案する。
- ③SDGsの視点を総合的に含んだカリキュラムを作成し、その関連性を測定できる評価表を作る。
- ④学習活動を統合する。

T-13 プラーサイ・ジェートサン (ぜひしたい)

- ①ESDとGCEDの実施を充実させる。
- ②生徒が他者に敬意を払い、社会に配慮するようになるよう指導する。
- ③同僚のネットワークを構築し、より緊密に連携して働くようにする。

■質問 17. 交流を継続したいか

有効回答数：15



T-03 ワンディー・ヌーポン (思う)

日本人の先生方との関係を継続させるために、FacebookやLINEなどのSNSを利用して学びをシェアしたい。

T-05 チャユット・ローカム（とても思う）

・このような交流プログラムは継続的に実施して欲しい。参加した日タイ両国の教育省職員や教師陣から教育面の知識を共有してもらえた。

・既に実施したが、自分の学校の児童生徒を日本に連れて来て交流・視察した。

T-09 ターパニー・ウォンサワット

（とても思う）

訪問中に芽生えた友情は重要である。それにより、連絡を取り合い、進捗を報告したりするなどして、前に進む力となる学びのネットワークを生むので。

T-09 ターパニー・ウォンサワット（絶対必要）

日タイの教師に学びの機会を与え、お互いに学び合い、人間関係を構築し、相互理解を深め、人的ネットワークを構築するのでプログラムの継続は必要である。

T-11 ルジナン・ポンナー（絶対必要）

①日タイ教職員の経験をお互いにシェアするため

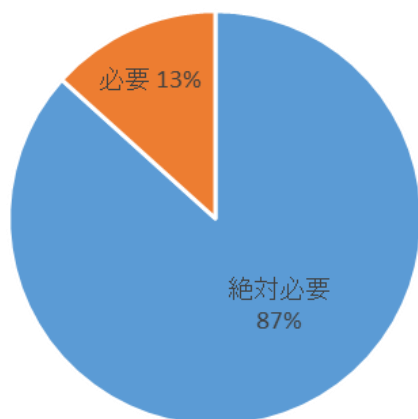
②両国間の学びのネットワークを作るため

③指導モデルを開発し、公開授業による研修をシステム化するため

④遠隔地の学校にいる教員に対して、キャリアの構築ができるよう経験をシェアするため

■質問 18. このプログラムの継続は必要か

有効回答数：15



T-07 ナパット・ランカウォン（絶対必要）

タイ人教師は日本の教育がどのように良いかについてあまり知らないため、このプログラムがあると、タイの教育を改善するインスピレーションになる。

2. 受入れ機関

●灘中学校・灘高等学校 教頭 大西 衡 氏

① プログラムの全体的印象

- このプログラムに参加しようという方たちなので当然かも知れませんが、積極的に質問して何かを得ようという熱意を感じました。一方、礼儀正しい方たちで、気持ちよくお迎えすることができました。私個人的には、次々におこなわれる質問・応答をてきぱきと通訳して行かれる通訳の方がすごいなあと感嘆しました。

② プログラムの成果－教員・学校が得たもの

- タイからのお客様をお迎えするのは初めてなので、インパクトはありました。ただ、対応できた教員が限られていましたので、もう少し多くの教員と、質疑応答という硬い形式でなく、自由な交流ができればよかったです。こちらの反省材料でもあります。火曜日が週の中で唯一 7 時間目まで授業がある日で、自由になる教員が限られていたという事情もあります。

③ 苦労した点

- 訪問の時期が 2 学期末考査の直前であったため、自習を含む 2 学期のまとめ的な授業をおこない、通常通りの授業をおこなわないケースが多く、見学してもらう授業を選ぶのに苦労しました。日本においては、クラブ活動が授業と並び、学校生活における重要な要素ですが、活動休止期間で見ていただけなかったのも残念です。

④ プログラムの改善に向けた助言

- やはり時期を選ぶことが必要だと思います。今回の日程では、私立の中高のほとんどが期末考査直前、公立の多くは期末考査期間中になってしまいます。

●徳島県上板町立高志小学校 校長 武田 國宏 氏

① プログラムの全体的印象

- 最も印象的だったのは、高志小学校の学校経営・教育活動に対してタイ教職員と意見交流をした内容である。タイの先生方が何に関心をもち、彼らがタイでどのような教育活動を展開したいのかがよく理解できた。特にユネスコが提唱する「ハッピースクール」のコンセプトは高志小学校でも詳細に学ぶ必要があると感じた。

② プログラムの成果－子どもたちが得たもの

- まずは、タイ教職員が15名来校していただけたことが児童にとって最大の多文化共生教育であった。さらに、タイの文化紹介というテーマで5・6年生に授業をしていたことが児童にとってはタイを身近に感じることができる交流会であった。文化交流授業でタイの先生からいただいた各種の品物が「タイミニ博物館」として高志小学校の階段踊り場に展示されている。徳島の伝統文化である阿波踊りを一緒に踊ったこともタイの人を身近に理解することにつながった。

③ プログラムの成果－教員・学校が得たもの

- (教職員)
 - ・ 教職員として自分の実践や意見や自信を持ち、堂々とプレゼンテーションする力を高めなければならないという意識の向上。
 - ・ SDGsは単に校長のやりたいことでなく、世界共通の実践テーマであるという認識の深まり。
 - ・ 多文化共生教育、自国文化理解教育、英語教育の重要性の認識。
 - ・ 世界の教育に視野を広げ日本の教育の在り方を見直すことの必要性の認識。
 - ・ 多文化交流のノウハウの取得と徳島・日本文化の更なる理解
- (児童)
 - ・ アジアの国のメンバーであるタイ文化の理解とタイへの好感度のアップ
 - ・ 国際交流を深めるために、英語をもっと学ぶ必要性やICTツールを積極的に活用する技能を身につけることの必要性
 - ・ 異文化の方に接するノウハウの取得（あいさつ・誠実さが必要）

④ 苦勞した点

- 高志小学校の何を見ていただくことが、このプログラムの目的を達成することになるのかの内容の発案。徳島の文化、日本の文化を体験してもらうための事前の関係機関との調整。校長である私一人でこれらのことを行ったためにかなりの時間が必要であった。各種体験活動の実施に際しての予算の確保。

⑤ **加えるとよいと思われる活動**

- 15 名程度なので一つの学校で 3 日間受け入れが可能であれば、夕食時にホームビジットを実施すれば保護者、地域の方の理解が一層深まると考える。

⑥ **プログラムの改善に向けた助言**

- 事前にかなり詳細にメールでの情報共有ができていたのでスムーズに予定が実践できた。学校が不便な場所にあるために、バスの駐車場所等の確認が不十分でありタイの先生方に迷惑をかけました。詳細な場所指定が必要でした。タイの先生方の待機スペースとトイレが離れていたために不便をかけました。タイの先生方が一番魅力を感じていたのは、フォーマルにカジュアルに高志小学校の経営方針や実践について話し合うことでした。もう少し長い時間を設定することができれば、高志小学校の教員からの質問を出すことができたかと反省しています。徳島の田舎の名も無い小さな学校の高志小学校にこのような機会を与えていただいた事に深く感謝いたします。

●徳島県立徳島北高等学校 教頭 向井 佳子 氏

① プログラムの全体的印象

- タイ国のいろんな地域の先生方が、児童生徒のためによりよい教育の実践を目指されている姿が印象的でした。

② プログラムの成果－子どもたちが得たもの

- 英語での交流が印象に残ったようです。英語が母国語でないもの同士の交流で、英語学習の必要性を痛感したようです。どうしても質問を受けてそれに答えるという形態が多かったようで、生徒が質問するということはあまりできなかったようです。

③ プログラムの成果－教員・学校が得たもの

- SDGs に関心が高かったことに感銘を受けました。本校でも SDGs を教育活動の中に取り入れ始めたところですが、さらに推進する必要を感じました。

④ 苦勞した点

- 指定を受けた日程が、期末テストの直後で、国際英語科の生徒が海外語学研修に出発する前日であったことなど、日程的にタイトであったこと。

⑤ 加えるとよいと思われる活動

- やはり、生徒は大人ではなく同世代の生徒に関心があるので、タイの児童・生徒の様子を紹介などがあれば良かったかもしれません。

⑥ プログラムの改善に向けた助言

- こちらも事前にタイの教育事情について知っておく必要があると思った。その上でないと、日本の教育事情を説明しても説明が不十分になると感じた。

3. 事業担当者コメント

この度、文部科学省の委託のもと、タイ教育省および受入れ協力校・機関のご協力により、第5回目となる「タイ教職員招へいプログラム」を実施することができました。ここに改めて関係者の皆さまに厚く御礼申し上げます。

今回のプログラムでは、兵庫県神戸市で1校、徳島県の上板町と徳島市で1校ずつ、計3つの学校を訪問しました。神戸市で訪問した灘中学校高等学校では、男子校・一貫校という点からの特色や教育方針について多くの質問が出ました。上板町立高志小学校では、地域とともに歩む学校の姿や力を入れている取り組みを見せていただくとともに、タイ教職員による授業も提供されました。最後に訪問した徳島県立徳島北高等学校では、卒業後の進路選択や国際理解教育について学び、高校生と直接交流する機会もありました。

タイの先生方の多くは、日本の学校でSDGsの達成に向けてどういった教育活動を行っているかということに高い関心を寄せていらっしゃいました。アンケートの結果では、2日間訪問した上板町立高志小学校の取り組みについて書いた参加者が多くいましたが、3つの学校訪問や交流会等あらゆる場面でSDGsの様々な目標が話題にのぼり、教育現場での関心の高さが感じられました。日本でもタイでも「知っている人々が頑張って取り組んでいる一方で、よく分からないという人も多い」という状況は共通しています。プログラムを通して知り合った教職員が今後更なる交流を進めていく中で、学びあい、励まし合いながら互いの教育活動をよりよいものにしていくことを願っています。

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター
国際教育交流部 高松 彩乃



付録

付録 1 文部科学省講義資料

付録 2 プログラム写真

付録 3 過去のプログラム実績

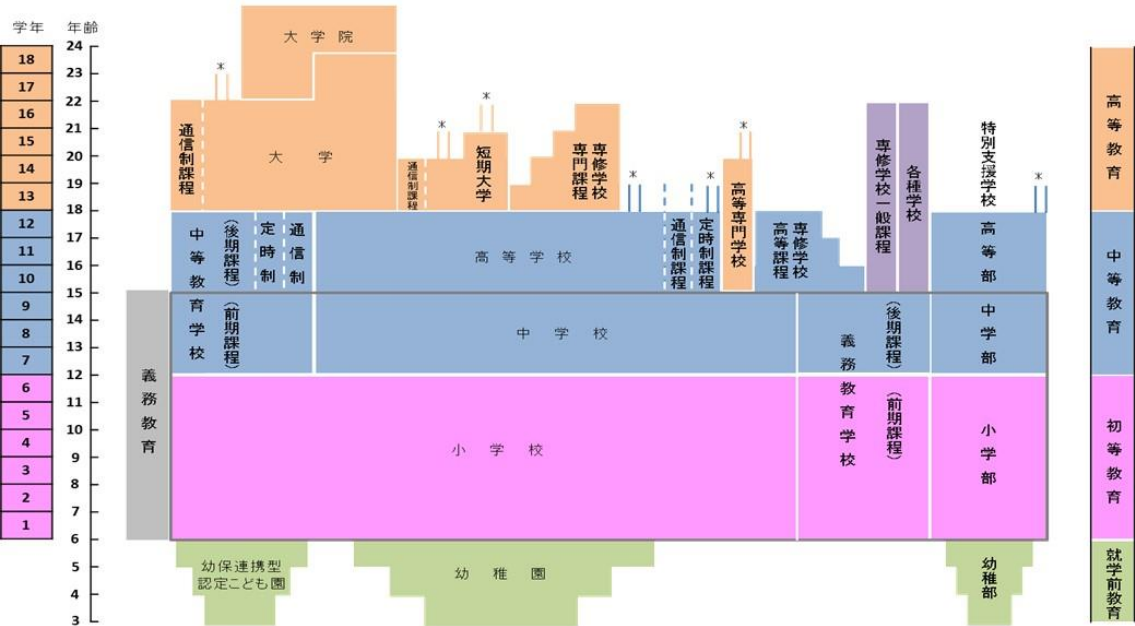
付録 1 文部科学省講義資料

日本の初等中等教育の概要

文部科学省 初等中等教育局 国際企画調整室
令和元年12月3日

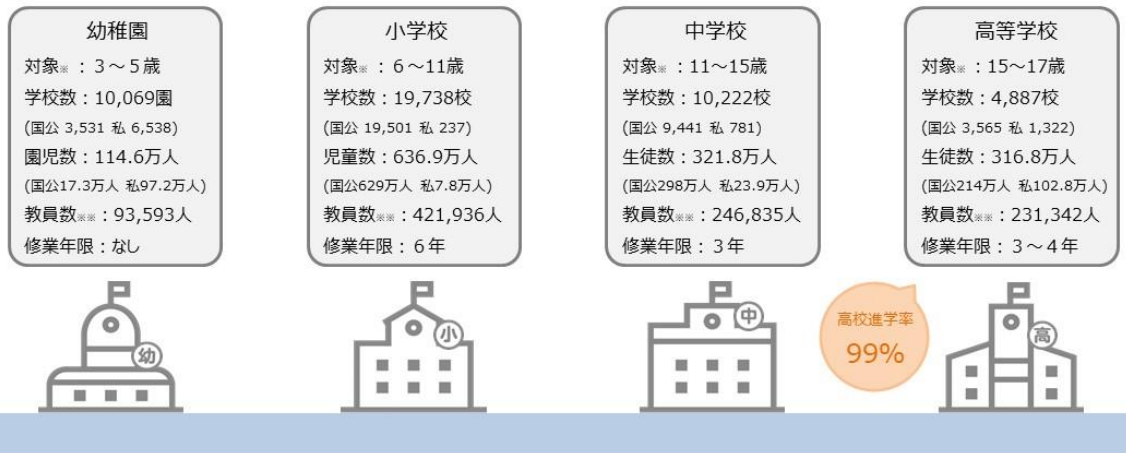


学校体系



(注) (1) *印は専攻科を示す。
(2) 高等学校、中等教育学校後期課程、大学、短期大学、特別支援学校高等部には修業年限1年以上の別科を置くことができる。
(3) 幼保連携型認定こども園は、学校かつ児童福祉施設であり0～2歳児も入園することができる。
(4) 専修学校の一般課程と各種学校については年齢や入学資格を一律に定めていない。

学校数、生徒、教員数



※通常の在学年齢、※※本務教員数

特別支援学校



特別支援学校（幼稚園・小学部・中学部・高等部）

対象※：3～17歳	生徒数：14.4万人 (国公14.4万人 私0.1万人)	修業年限：幼稚園 なし
学校数：1,146校 (国公 1,132 私 14)	教員数※※：85,336人	小学部 6年
		中学部 3年
		高等部 3年

(出典) 令和元年度学校基本調査（速報値） 3

義務教育制度の概要

憲 法

第26条 すべて国民は、法律の定めるところにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する。

すべて国民は、法律の定めるところにより、その保護する子女に普通教育を受けさせる義務を負ふ。義務教育は、これを無償とする。

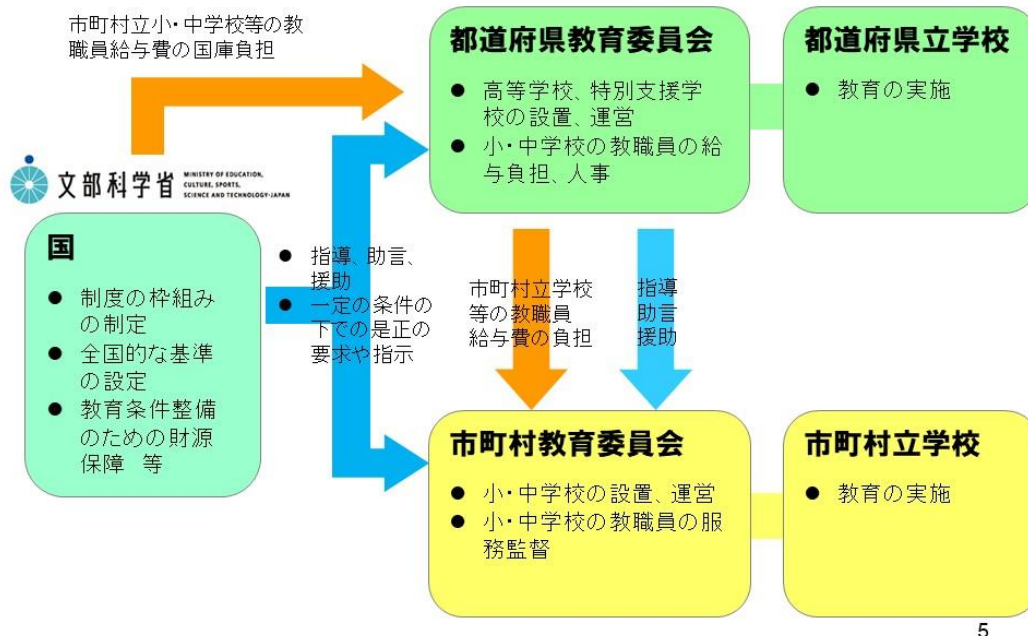
教育基本法

第5条 国民は、その保護する子に、別に法律で定めるところにより、普通教育を受けさせる義務を負う。

- 2 義務教育として行われる普通教育は、各個人の有する能力を伸ばしつつ社会において自立的に生きる基礎を培い、また、国家及び社会の形成者として必要とされる基本的な資質を養うことを目的として行われるものとする。
- 3 国及び地方公共団体は、義務教育の機会を保障し、その水準を確保するため、適切な役割分担及び相互の協力の下、その実施に責任を負う。
- 4 国又は地方公共団体の設置する学校における義務教育については、授業料を徴収しない。

4

教育行政における国・都道府県・市町村の役割分担



5

義務教育費国庫負担制度について①

制度の基本的役割

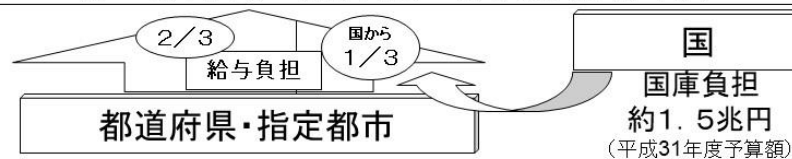
○憲法の要請に基づき、義務教育の根幹(機会均等、水準確保、無償制)を国が責任をもって支える制度。

制度の概要

- 市町村が小中学校を設置・運営。
- 都道府県が市(指定都市除く)町村立学校の教職員を任命し、給与を負担。【県費負担教職員制度】
- 指定都市は設置する学校の教職員の任命、給与負担を一元的に行う。
- 国は都道府県・指定都市に係る教職員給与費の1/3を負担。(平成18年度1/2→1/3)

公立義務教育諸学校の教職員の給与費(総額約4.5兆円)

(約68.7万人:小学校41.0万人、中学校23.0万人、特別支援学校4.7万人)



国庫負担金の算定方法

給与単価 × 国庫負担定数※ × 1/3

(※標準法定数(基礎定数+加配定数))

6

学習指導要領

学習指導要領とは

全国的に一定の教育水準を確保するとともに、実質的な教育の機会均等を保障するため、国が学校教育法に基づき定めている大綱的基準。学習指導要領では、小学校、中学校等ごとに、それぞれの教科等の目標や最低限教えるべき教育内容を定めている。これまで、おおむね10年ごとに改訂してきている。

学習指導要領に関する法制上の仕組み

国	学習指導要領など、学校が編成する教育課程の大綱的な基準を制定 (各教科等の構成、年間の標準時間数、教科等の大綱的な目標、内容等)
教育委員会 (設置者)	教育課程など学校の管理運営の基本的事項について規則を制定 (学年・学期、休業日、校務分掌、教育課程編成や教材使用の手続き等)
学校 (校長)	学校や地域、児童生徒の実体等を踏まえ、 創意工夫した教育課程を編成・実施

7

「学力の三要素」と「生きる力」について

〈現行学習指導要領の理念〉

- 平成10～11年改訂の学習指導要領の理念は「生きる力」を育むこと
- 「知識基盤社会」の時代において「生きる力」を育むという理念はますます重要
- 教育基本法改正等により教育の理念が明確になるとともに、学校教育法改正により学力の重要な要素が規定

○ 学校教育法（昭和22年法律第26号）

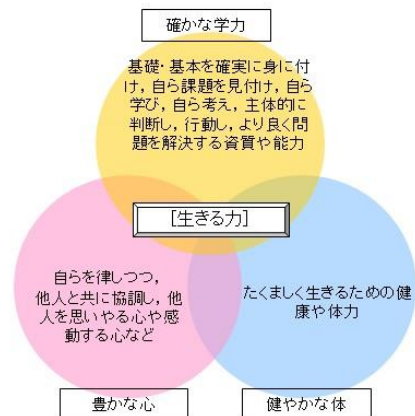
第30条（略）

② 前項の場合においては、生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。



現行学習指導要領においては、これまでの理念を継承し、教育基本法改正等を踏まえ、「生きる力」を育成

「ゆとり」か「詰め込み」かではなく、これからの社会において必要となる知・徳・体のバランスのとれた「**生きる力**」をより効果的に育成

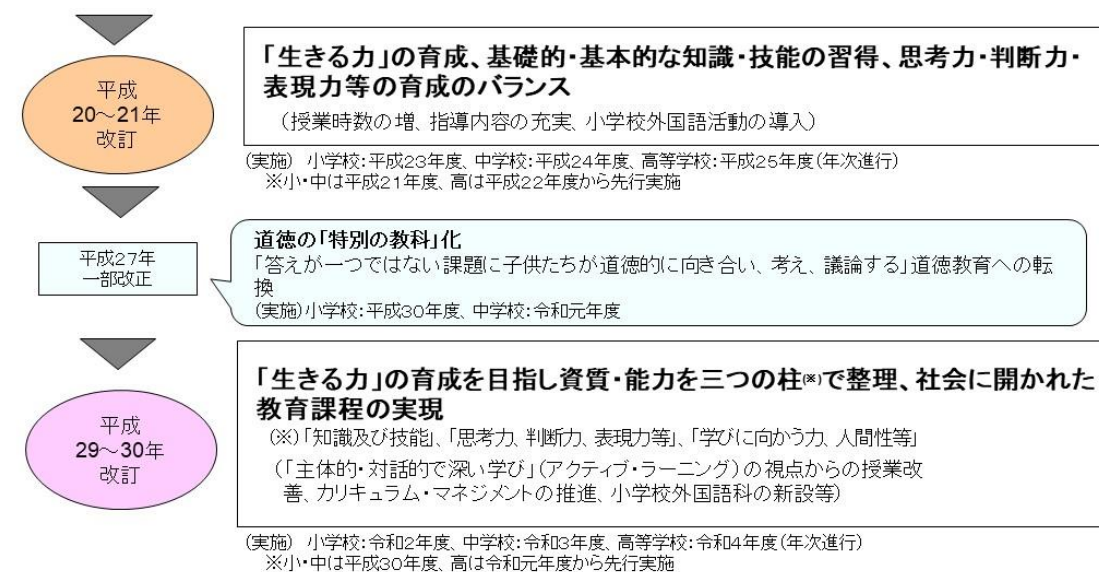


8

学習指導要領の変遷①



学習指導要領の変遷②



学習指導要領改訂の考え方

新しい時代に必要となる資質・能力の育成と、学習評価の充実

学びを人生や社会に生かそうとする
学びに向かう力・人間性等の涵養

生きて働く知識・技能の習得

未知の状況にも対応できる
思考力・判断力・表現力等の育成

何ができるようになるか

よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を共有し、
社会と連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む

「社会に開かれた教育課程」の実現
各学校における「カリキュラム・マネジメント」の実現

何を学ぶか

新しい時代に必要となる資質・能力を踏まえた 教科・科目等の新設や目標・内容の見直し

小学校の外国語教育の教科化、高校の新科目「公共（仮称）」の新設など
各教科等で育む資質・能力を明確化し、目標や内容を構造的に示す

学習内容の削減は行わない※

どのように学ぶか

主体的・対話的で深い学び（「アクティブ・ラーニング」）の視点からの学習過程の改善

生きて働く知識・技能の習得
など、新しい時代に求められる
資質・能力を育成
知識の量を削減せず、質の高い
理解を図るための学習過程
の質的改善



※高校教育については、些末な事実的知識の暗記が大学入学者選考で問われることが課題になっており、そうした点を克服するため、重要用語の整理等を含めた高大接続改革等を進める。

11

主体的・対話的で深い学びの実現

（「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善）について（イメージ）

「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善を行うことで、学校教育における質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けるようにすること

【主体的な学び】

学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。

【例】

- ・ 学ぶことに興味や関心を持ち、毎時間、見通しを持って粘り強く取り組むとともに、自らの学習をまとめ振り返り、次の学習につなげる
- ・ 「キャリア・パスポート（仮称）」などを活用し、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったりする

主体的な学び
対話的な学び
深い学び

【対話的な学び】

子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。

【例】

- ・ 実社会で働く人々が連携・協働して社会に見られる課題を解決している姿を調べたり、実社会の人々の話を聞いたりすることで自らの考えを広げる
- ・ あらかじめ個人で考えたことを、意見交換したり、議論したり、することで新たな考え方に気が付いたり、自分の考えをより妥当なものとしたりする
- ・ 子供同士の対話に加え、子供と教員、子供と地域の人、本を通して本の作者などとの対話を図る

【深い学び】

習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。

【例】

- ・ 事象の中から自ら問いを見だし、課題の追究、課題の解決を行う探究の過程に取り組む
- ・ 精査した情報を基に自分の考えを形成したり、目的や場面、状況等に応じて伝え合ったり、考えを伝え合うことを通して集団としての考えを形成したりしていく
- ・ 感性を働かせて、思いや考えを基に、豊かに意味や価値を創造していく

12

○ 教科書制度

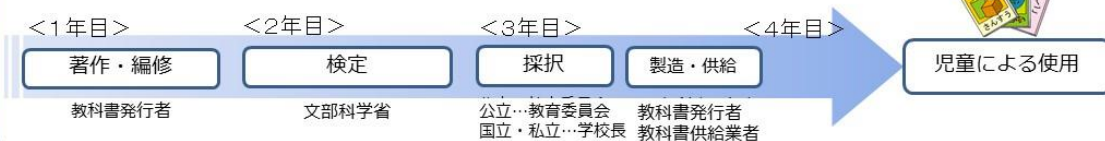
【教科書とは】

全ての児童生徒の学校における授業や家庭における学習活動において、重要な役割を担っている主たる教材

<教科書の法的位置付け>

- ①各学校において使用しなければならない = 「使用義務」
- ②文部科学大臣による検定を経る必要がある = 「質の確保」
- ③国から発行者に対する発行指示、定価の認可等 = 「安定供給の確保」 等

【教科書が使用されるまで】



【教科書無償給与制度】

- ・我が国においては、教科書の役割の重要性から、その使用義務が法律で定められている。
- ・憲法第26条の義務教育無償の精神をより広く実現するものとして、授業料の不徴収に準じ、教科書が無償給与される。
- ・無償給与の対象は国・公・私立の義務教育諸学校の全児童生徒、その使用する全教科の教科書。
- ・平成29年度予算には、義務教育教科書購入費として、約416億円を計上。

12

教育委員会制度の仕組みと趣旨

教育委員会制度の仕組み

- 教育委員会は、首長から独立した行政委員会として全ての都道府県及び市町村等に設置。
- 教育委員会は、教育行政における重要事項や基本方針を決定。
- 教育委員会は、常勤の教育長1人と非常勤の教育委員4人の原則5人で構成。任期は教育長は3年、教育委員は4年でそれぞれ再任可。
- 教育長は、教育委員会の会務を総理し、教育委員会を代表する(会議の主宰者、具体的な事務執行の責任者、事務局の指揮監督者)。地方公共団体の長が、議会の同意を得て任命。

制度の趣旨

A 政治的中立性の確保

- 教育は、その内容が中立公正であることが極めて重要。個人的な価値判断や特定の党派的影響力から中立性を確保することが必要。

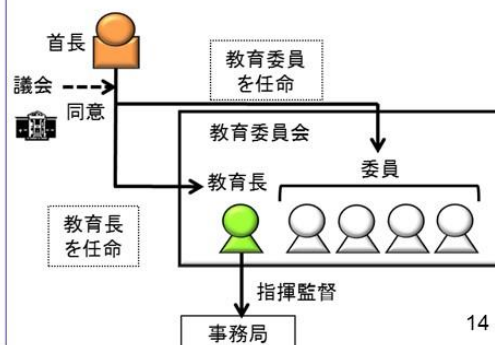
B 継続性・安定性の確保

- 特に義務教育について、学習期間を通じて一貫した方針の下、安定的に行われることが必要。

C 地域住民の意向の反映

- 教育は、地域住民にとって関心の高い行政分野であり、専門家のみが担うのではなく、広く地域住民の参加を踏まえて行われることが必要。

(イメージ図)

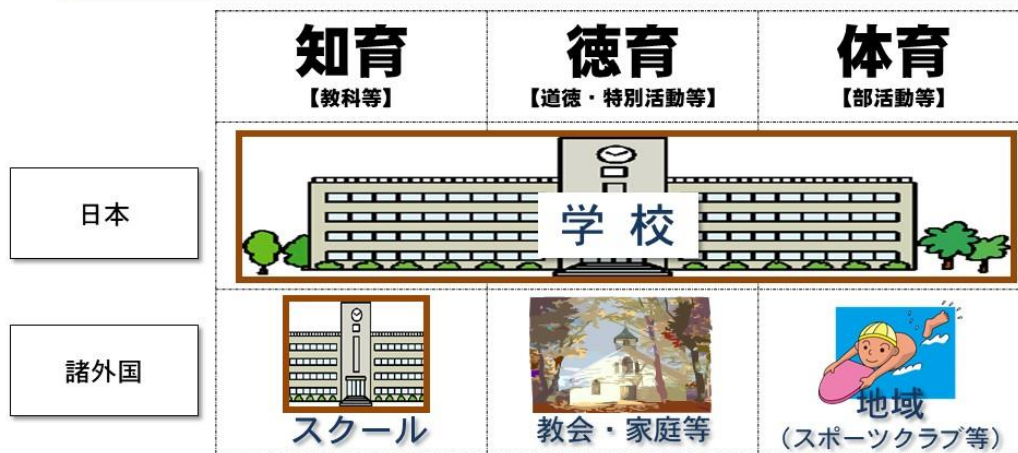


14

「学校」の在り方の国際比較

日本の「学校」と、諸外国の「スクール」の在り方は大きく異なる。

- 諸外国の教員の業務が主に授業に特化しているのとは異なり、日本の教員は、教科指導、生徒指導、部活動指導等を一体的に行うことが本務。
- 日本の学校は地域社会の中核であり、地域コミュニティの活性化に重要。



※体育…部活動は、日本は学校を中心に行うが、米・英は学校と地域で、独・伊・北欧は地域を中心に行う。

17

日本の学校教育の特徴

全人的な学び

諸外国では、教員の業務が主に授業に特化しているのに対し、**日本では、教員が、教科指導、生活指導、部活指導等を一体的に行い、生きる力（確かな学力、豊かな人間性、健やかな体）をバランスよく育む全人的な教育を行っている。**

これは、日本の学校が、それぞれの時代において社会の要請に応えながら、子供たちに必要とされる資質・能力を育むことができるよう発展してきた姿であり、こうした「日本型学校教育」は、国際的にも高く評価され、学力面ではPISA等の国際調査で世界トップレベルになっている。

学校給食の役割

①子供たちが食に關する正しい知識と健全な食習慣を身に付けること
②食を通じて地域を理解・食文化を継承すること
③食の楽しみや食の豊かさを学ぶこと

掃除

日本のほとんどの小・中・高校では、掃除の時間が設けられ、児童生徒が協力して教室、廊下、お手洗い等の掃除をする。

じかんわり				
	時	分	秒	分
0:00~0:05	0	0	0	0
0:05~0:10	0	5	0	0
0:10~0:15	0	10	0	0
0:15~0:20	0	15	0	0
0:20~0:25	0	20	0	0
0:25~0:30	0	25	0	0
0:30~0:35	0	30	0	0
0:35~0:40	0	35	0	0
0:40~0:45	0	40	0	0
0:45~0:50	0	45	0	0
0:50~0:55	0	50	0	0
0:55~1:00	0	55	0	0
1:00~1:05	1	0	0	0
1:05~1:10	1	5	0	0
1:10~1:15	1	10	0	0
1:15~1:20	1	15	0	0
1:20~1:25	1	20	0	0
1:25~1:30	1	25	0	0
1:30~1:35	1	30	0	0
1:35~1:40	1	35	0	0
1:40~1:45	1	40	0	0
1:45~1:50	1	45	0	0
1:50~1:55	1	50	0	0
1:55~2:00	2	0	0	0

16

「新時代の学びを支える先端技術活用推進方策(最終まとめ)」 2019年6月公表

新時代における先端技術を効果的に活用した学びの在り方

～新時代に求められる教育～

Society5.0時代の到来

求められる能力

- 飛躍的な知の発見・創造など新たな社会を牽引する能力
- 読解力、計算力や数学的思考力などの基礎的な学力

社会構造の変革

- 人間一人一人の活動に関与するデータ(リアルデータ)活用による革新的サービス
- ビッグデータ・人工知能(AI)の発達による新たなビジネスの拡大

雇用環境の変革

- 単純労働を中心に、人工知能(AI)やロボティクスの発展による影響
- 人間は、創造性・協調性が重要な業務や非定型な業務を担う

子供たちの多様化

- 他の子供たちとの学習が困難
- ASD、LDなどの発達障害
- 日本語指導が必要
- 特異な才能を持つ など



多様な子供たちを「誰一人取り残すことのない、公正に個別最適化された学び」の実現

ICTを基盤とした先端技術や教育ビッグデータの効果的な活用に大きな可能性

〔 ICTを基盤とした先端技術・教育ビッグデータは教師本来の活動を置き換えるものではなく、「子供の力を最大限引き出す」ために支援・強化していくもの 〕

各教科の本質的理解を通じた
基盤となる資質・能力の育成

協働学習・学び合いによる
課題解決・価値創造

日本人としての
社会性・文化的価値観の醸成

学校・教師の役割

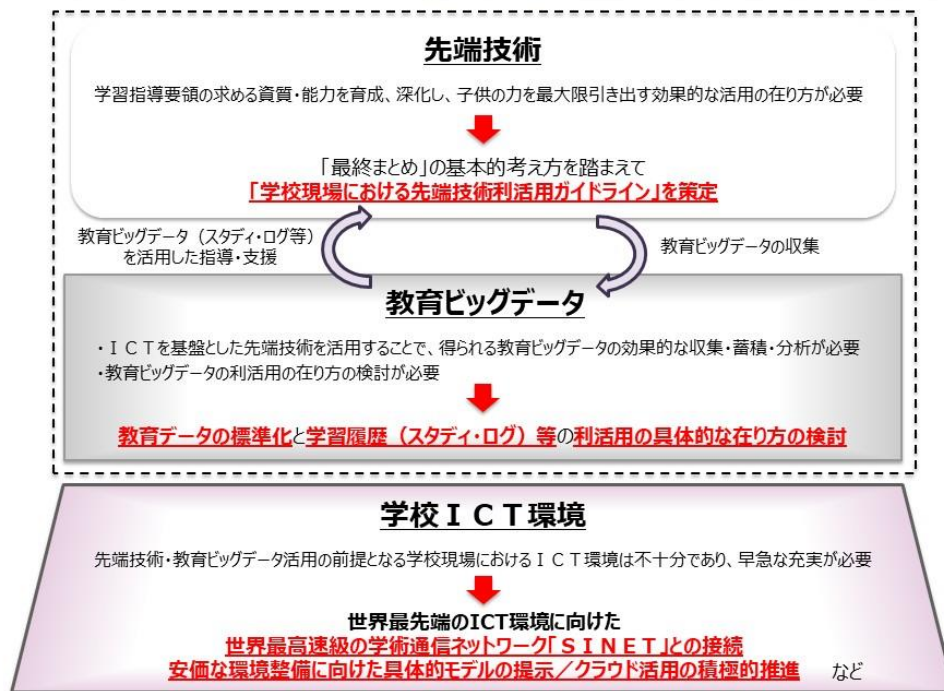
17

教育現場でICT環境を基盤とした先端技術・教育ビッグデータを活用することの意義



18

先端技術・教育ビッグデータの効果的な活用とICT環境の整備について取組むべき方策 (全体像)



19

ご清聴ありがとうございました。

付録2 プログラム写真



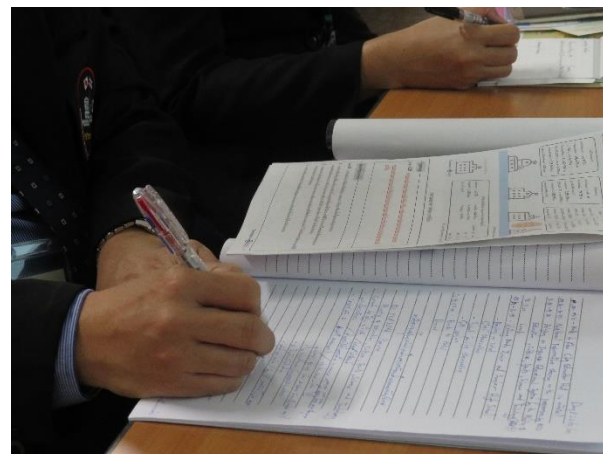
オリエンテーション



プログラム初日の夕食



文部科学省による講義を受講する訪問団



熱心に講義のメモを取る様子



日本酒「福寿」の酒蔵に併設されたレストランで昼食を味わう





授業見学（瀬中学校高等学校）



図書館の見学（瀬中学校高等学校）



質疑応答（瀬中学校高等学校）



集合写真（瀬中学校高等学校）



上板町教育委員会 瀬尾教育長への記念品贈呈



徳島の和三盆の紹介（高志小学校）



小学生と阿波踊りを楽しむ（高志小学校）



藍染めに挑戦する訪問団（Watanabe's）



授業見学中の交流（高志小学校）



Food Hub の方による食事の説明（おもてなしランチ）



研究授業で子どもと同じ課題に挑戦（高志小学校）



校長 武田氏への記念品贈呈（高志小学校）



徳島の先生方・地域の方々との夕食会



校長の長篠氏による学校説明（徳島北高等学校）

書道室で先生の実演を見学（徳島北高等学校）



訪問団の興味を引いた図書館の展示（徳島北高等学校）

高校2年生との昼食交流（徳島北高等学校）



プログラムレビュー会議 第一部



プログラムレビュー会議 第二部



昼食交流



自己紹介タイム（日タイ教育交流会）



互いの学校文化を知るアクティビティ（日タイ教育交流会）



テーマ別意見交換（日タイ教育交流会）

付録3 これまでのプログラム実績

実施期間	開催地	訪問人数
2015 年 11 月 9 日～15 日	東京都、千葉県	15 名
2016 年 10 月 4 日～10 日	東京都	15 名
2017 年 10 月 15 日～22 日	東京都、岡山県吉備中央町	15 名
2018 年 11 月 27 日～12 月 3 日	東京都、宮城県	15 名
2019 年 12 月 2 日～12 月 8 日	兵庫県、徳島県（上板町、徳島市）	15 名

計 75 名

※ 2015 年度から 2017 年度は国際連合大学「国際教育交流事業」として、2018 度以降は文部科学省「初等中等教職員国際交流事業」として、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センターが委託を受けて実施・運営。

文部科学省委託 2019 年度初等中等教職員国際交流事業

タイ教職員招へいプログラム 実施報告書

2020 年 2 月

編集・発行 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

〒101-0051

東京都千代田区神田神保町 1-32-7F 出版クラブビル

電話 (03)5577-2853

Email accu-exchange_ml@accu.or.jp

URL <http://www.accu.or.jp>

©2020 Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)